

# 琉球大学学術リポジトリ

<南洋文学の中の沖縄人像

2> 土人の床下に寝ている沖縄人：  
能仲文夫の見た沖縄人たち

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学法文学部 公開日: 2007-10-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 仲程, 昌徳, Nakahodo, Masanori メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/2296">http://hdl.handle.net/20.500.12000/2296</a>

〔南洋文学の中の沖縄人像 2〕

## 土人の床下に寝ている沖縄人

— 能仲文夫の見た沖縄人たち —

仲 程 昌 徳

昭和9年(1934)12月1日に刊行された能仲文夫著『南洋紀行 赤道を背にして』(以下『紀行』と略記)は、3日後の12月4日には2版、12月20日には3版、翌10年1月14日には4版、そして1月29日には5版と、2カ月で5版を重ねている。能仲の『紀行』が、当時かなり人気を呼んだ1冊であったことはそれだけでもわかるが、小菅輝雄によると、「昭和10年11月改訂普及版を出す時には13版を発行する」ほどのベスト・セラーになっていたという。小菅は、能仲の『紀行』がそのように版を重ねたのは、「南進熱」の高揚と関係していたと見た。

能仲は、『紀行』の「自序」で、「群島は国防的にも重大ではあるが産業経済的にも重要価値があることを忘れてはならない。つまり群島を踏み台に表南洋に進出しなければならない」と説き、「この南洋を視察して得た結論は日本民族は近き将来南方へ進出しなければならない必然的の運命を持っているということである。即ち日本民族が南に覇を唱えるには土着民族を如何にして経済的に使用するかということにある」と力説していた。

「自序」に見られる「南進」基地観と群島民「使用」論。この南洋論の両輪をなす見解は時局に適合した。そして、『紀行』がマリアナ、カロリン、マーシャルといった南洋群島のほぼ全領域にまたがる見聞録であったことから、絶好の「南進」読本として迎えられたということもある。しかし、それだけではない。『紀行』が読まれたのは、何よりも「かなり土人の生活を織り混ぜ面白く(事実は如実に)南洋の姿を描き出したつもりである」と述べているそのことにあったと思われる。この「面白く」は、極めて「猟奇的」な意味合いが強く、読者は、「南進論」などというきな臭い話題よりも、むしろその煽情的な部分に引き寄せられていったのではないか。

いずれにせよ、『紀行』が多くの読者に、「南洋」への興味を呼び起こしたのは間違いない。と同時に「南洋」の日本人たちへの関心も呼び覚ましたに違いない。能仲の目に、日本人たち、とりわけ南洋への移民が盛んであった沖縄人たちが、どのように映ったか。能仲の写し取った南洋の沖縄人像が、日本内地における沖縄人観にまったく影響がなかったとは考えられないことからしても、「沖縄（人）」に触れた部分は、逐一拾い上げて見ておく必要があろうかと思う。

○

能仲が、「フィリッピン、ダバオ行き横浜丸」に乗り込んで、横浜の波止場を発ったのは、昭和9年（1934）5月5日。船が岸を離れて、船中に目を移した能仲がまず感じたのは、「南洋航路の船は毎航海とも移民船だ」ということだった。

南洋航路の船は毎航海とも移民船だ。噓返るような狭苦しい三等室内に男も女もない、まるで寿司詰のようにうごめいている。彼等の大部分は門司から乗船した沖縄の移民達で、行く先は横浜から直行で五日かかるサイパン島か、乃至隣島テニアン島へ、南洋興発直営の甘蔗栽培に出稼ぎに行く農業移民である。

私が内地にいて想像していた沖縄人は内地人とそれ程異なる点もないと思っていたが、今見る沖縄人の船中生活は、どうしても日本人とは思えないような生活振りで、暑いから無理もないのだろうが、男も女も殆ど半裸体になって、来る日も来る夜も、船中のあちこちに一団となり、強烈な泡盛を呷っている。そして、蛇の皮で張った沖縄特有の蛇皮線をガチャガチャ鳴らしながらとてつもない高い声と一向聞きとれない節廻しで唄っている。その唄の文句はいくら考えても私達には到底解釈出来ないものであった。味も素気もない蛇皮線が鳴り出すと、その音に調子を合わせて、誰彼となく飛び出せば、手拭いをチョコンと頭に掛けて踊り始める。その踊りかたも内地人が踊るようなしなのある踊りかたではない。グルグルッと廻っては足を床にどんと踏んぱったり、両手を前に突き出したり、締めたりして、その踊る恰好を見てみると、ちょうど戦国時代にでもやったであろうと思われる戦勝祝いの踊り

のようだ。唄う歌詞なども一語位分かるかと、耳を澄ましたが、一語も分からなかった。

【サイパンへ行って沖縄人の生活を見れば一番よく分かりますよ】

ボーイは毎航海乗り込む沖縄人の船中生活はみんなこうです、と云っている。いろいろ彼等の日常生活まで語ってくれた。

食事の鐘が鳴ると、彼等とその一団はワァワァと喚声を上げて、食卓へ押しかける。そして飯をむさぶるようにしてガツガツかき込むのだ、その光景の凄まじいことさながら戦場のようである。

お櫃がひっくり返る、飯粒が飛ぶ、皿が転がり、汁がこぼれる、子供が泣く、雑然、騒然、人間生活の隠さない一面をここで洗い晒しに見せられるような気がする。ボーイは酒男が樽を擔ぐような恰好で、幾度も幾度も飯櫃を運んだ。

「白い米の飯が珍しいんですよ、沖縄にいちゃ食われませんからね……」

沖縄にいたという船員の一人が、沖縄の不景氣話を持ち出した。今日、日本内地で最も人口過剰に依り不景氣に悩まされているのは沖縄であるという。彼等は郷里にいては、食って行けないので海外へ、海外へと出稼ぎに出る。米の飯などは普通のものでは口にすることも出来ない。大抵芋を常食として、白い飯にありつけるのは先ず盆と正月位のものである。そこで背と腹は変えられず働けるものはどンドン島を飛び出しては、生きる道を求めて行く。南洋もまた彼等にとっては有力な戦場なのだ。彼等はちょうど支那苦力のように、凡ゆる艱難と闘うだけの辛抱強さを持っている。この点到底内地人は如何に逆立ちしても、太刀打ちは出来ないのだ。飯に海水をブツかけて、それを平気で食うなどは彼等にすればなんとも思っていない。然し、こうした耐久力と辛抱強さを持っているのは、沖縄人の通有性だが、このうち、最も極端なのは糸満人といって、漁業を得意とする一派がある。南洋へ出稼ぎに出ている鰹漁業者の先ず大部分はこの糸満人だという。それに沖縄と南洋とは気候の上に於いても、それ程の差もないので、ボカリと出稼ぎに行く内地人は、最初気候に慣れないうちは暑さで参るが、沖縄人は南洋の暑さにはそれ程に感じないものと見え、倒れるものなどは減多にない。彼等はどんな低

い生活でも、どんな苦しい仕事でも、やり抜けて行くのだ。南洋群島の産業経済を一握りしている南洋興発が、創業僅か十三年にして、現在の如き成功を見たのも、最初に沖縄人を雇った処に成功の因があるとさえ云われている。南洋を語るには沖縄人を除外しては南洋を語れない、そしてまた南洋に働く邦人筋肉労働者の大部分がこの沖縄人なのだから。

南洋への旅が始まると同時に、すぐに登場するのが「沖縄人」である。それは、沖縄人の南洋移民がいかに多かったかを語ってあまりあるものだが、その沖縄人は「男も女も殆ど半裸体」で「来る日も来る夜も、船中のあちこちに一団となり、強烈な泡盛を呷り、「蛇の皮で張った沖縄特有の蛇皮線をガチャガチャ鳴らし」「その音に調子を合わせて、誰彼となく飛び出しては、手拭いをチョコンと頭に乗せて踊り始める」といった風で、「日本人とは思えないような生活振り」であるというのが、能伸の第一印象であった。

そして、沖縄人について「沖縄にいたという船員」から聞いた話として、「彼等は郷里にいては、食って行けないので海外へ、海外へと出稼ぎに出る。米の飯などは普通のものでは口にすることも出来ない。大抵芋を常食として、白い飯にありつけるのは先ず盆と正月位のものである」ということ、「彼等はちょうど支那苦力のように、凡ゆる艱難と闘うだけの辛抱強さを持っている。この点到底内地人は如何に逆立ちしても、太刀打ち出来ない」ということ、「沖縄人は南洋の暑さにはそれ程に感じないものと見え、倒れるものなどは滅多にない。彼等はどんな低い生活でも、どんな苦しい仕事でも、やり抜けて行く」というようなことをあげ、能伸は「南洋を語るには沖縄人を除外しては南洋を語れない」と結論する。

能伸は、そこで特別な沖縄人像を作り上げていたわけではない。むしろありきたりといっているものであった。「泡盛」「蛇皮線」「踊り」は、沖縄を語る際のキー・ワードといってよかったし、とりわけ南洋の沖縄移民を語る場合なくてはならないものであった。また、船員が語ったという「辛抱強さ」はともかく、「芋を常食」としていること、「暑さ」に強いこと、「筋肉労働者」として「低い生活」「苦しい生活」に耐えられるといったようなことも、一般的な

沖縄人観であったとっていいだろう。

あとの一つにしても同様である。

それにこの沖縄移民たちの後を追ってゆく、沖縄と串本生まれの闇の女たちも三十人近く乗っていた。彼女たちは南洋でウンと儲けて借金を返すのだという。崩れそうな銀杏返しに、洗い古してよれよれになった浴衣や、単衣を着て、それが如何にもうらぶれた闇の女性を想わせる。日焼けして白粉の塗りも悪いのだろう。きめの荒い頬には赤ちゃけた地肌が見えていた。そしていつもだらしなく寝そべっては、始終ムシヤムシヤ何かしら食っている。「何処へ行きます・・・」

【サイパンへ、内地は不景気だからねえ】

彼女たちはいちように言うのであった。内地が不景気だから南洋へ行く、南洋はそれ程に景気がよいのであろうか、そして、彼女たちを容れる余地が果たしてあるのであろうか、私はまだ見知らぬ南洋の姿に対して、いろんな想像が巡らされていった。幾百、幾千哩の波頭を越えて男も辟易している南洋へ働きに出かけるこうした闇の女の度胸のよさに、私は思わず胸を打たれた。

「沖縄移民」を追っていく女たち。容姿や服装を整えることもせず、だらしなく寝そべっている女たち。いわゆる「闇の女」と呼ばれる彼女らは、必ずしも「沖縄」とは限らないが、それもまた「沖縄」をしるす一つであったことは間違いない。



能仲の乗った船は横浜港を出て5日目の朝、サイパンに着く。彼の「群島への上陸第一歩」の地点であるが、沖縄の移民たちも「大半はここで下りてしまった」という。

能仲は、「このサイパン島は群島中その面積も最も大きく周囲四十余哩、ここには邦人が、男女合わせて二万三千七百余人居り全群島総人口三万人の七割を占めている。このうち最も多いのは沖縄人の一万四千六百人で次がぐっと下がって東京の二千七百、福岡の一千、秋田の八百と云う順序だ」と書いている。

『南洋庁統計年鑑』によると、昭和8年の邦人総数は24,871人、そのうち沖縄県人は15,638人、能仲が渡った9年の邦人総数は30,296人、そのうち沖縄県人は18,543人となっていて多少の異動があるが、この一万数千人の沖縄人たちの中に、横浜丸に乗って来た新しい来島者たちが加わっていく。

サイバンは、沖縄でにぎわっていたとあっていいだろう。能仲の「紀行」に「沖縄」が多く見られるのもそのためであるが、能中の、サイバンにおける記述で、最初に出てくる沖縄は、次のようなものである。

私は何時の間にか島の料理屋街を歩いていた。窓から闇の女達が顔を突き出しては煙草を吹かしている。この島には料理屋が四十軒近くもあり、女の数も二百人は越えると聞いて驚いた。その多くは沖縄の女たちである。彼女達は客をとるにも、土人は絶対に登楼させてはならぬと厳重に禁じられている。それは日本女の性の秘密を知らせることは統治上面白いからだ。

能仲の「紀行」は、「料理屋街」や「性の秘密」の描写をふんだんに取りこんでいる。その点で、他のいわゆる「南進」書とは一線を画し、それが版を重ねさせた大きな理由になっていたと思われるが、サイバンに着いて早々に「料理屋街」を覗いていることにもそれはあらわれていよう。

能仲が、そこで見た「沖縄の女たち」は、あの船の中で一緒だった「闇の女」たちだったのだろうか。「沖縄の女たち」の中に、船の中にいた「闇の女」たちがすでに混じっていたかどうかは分からないが、いずれにせよ船の中での印象が、「その多くは沖縄の女たちである」という言葉には反映していよう。

能仲が、サイバンに上陸してまず見た「沖縄の女たち」は、そのように「料理屋街」で「客をとる」女たちであった。

そして男は、「沖縄」ではなく「オキナワ」と呼ばれていた。能仲がサイバンで眼にした最初の「沖縄の男たち」は、「オキナワ」と呼ばれる男たちだった。

私はピーターの結婚解消談を聞きながら、歩いているうちに、フト眼に止まったのは一軒の木造建てのチャモロの家だった。汚いカナカの小屋のなか

に混じって、ペンキ塗のその家は特に目立って立派に見えた。見れば家の床下に日本人らしい男が二人ゴザを引いて昼寝をしている。枕もとには葉罐と茶碗が二、三個とビール罎が三、四本転がっている。どう見ても床下に生活している人らしい。

「あれは日本人か？」

「ええそうです。オキナワでチャモロの床下を借りているんです」

ピーターは、床下を借りてと云いながら、さも遠慮するような態度で私の顔をじろりと見た。私はそのとき土人に侮辱されているような気がして、矢鱈に腹立たしくてならなかった。沖縄人と云っても、立派な日本人ではないか、この群島の土人を統治する位置に立っている日本人が、チャモロの床下を借りて生活するとはなにごとだ、私はだらしく口を開いて、寝そべっている二人の男に、力一杯撲りつけてやりたいような気持ちになった。

「オキナワは日本のカナカです」

ピーターはみんなそう云っていると説明した。

「沖縄人はだからカナカと同じだということか」

「そうだというわけではありませんが」

私の憤慨した態度にしまったとでも思ったのか、彼は巧みに言葉をそらした。

私はふと考えた、今日本民族は海外へ、海外へと雄飛しなければならぬ必然的運命を持っている。而も南方進出とこれが開拓にはどうしても土人を利用しなければこの海外進出の成功は覚束ない。つまり土人を如何にして経済的に利用するかということが、日本民族が南方へ進出する上に於いて、絶対に必要な条件である。それなのに、いま見る日本人はさながらチャモロ土人に征服されているような姿だ。オキナワは日本のカナカですと言うことを土人の口から直接聞かされた私はわがことのように口惜しかった。海外へ海外へと進出する沖縄人の勇壮な気持ちには大いに敬意を表するものだが、然し恥晒しの侮辱された生活までしてくれとは言わない。恥も外聞もない、ただ働きさえすればそれでよいというのでは、異民族を相手に、そしてまた異民族の中に混じっては海外進出の永続性は望まれない。必ず排斥の声は拳がるであろう。日本移民が海外に出て、排斥される理由は幾多あろうが、こ



うした点なども屹度その理由の一つであろう。一寸したことだが、われわれはあくまでも日本人だという自尊心と体面だけは忘れて貰いたくない。

【この島のカナカ達はだんだん日本人を尊敬しくなりますよ、此頃はカナカも凶々しくて困ります】

私は宿の番頭の言葉と、土人の床下に寝ている沖縄人とを思い合わせてこれでは成程無理もないと思った。

能仲は、「床下」に「ゴザを引いて昼寝」をしている2人の男を見つける。そして連れの男に彼等の素性を聞く。連れは、2人の男は「オキナワでチャモロの床下を借りている」と答える。

「料理屋街」の「沖縄の女」たちの後に、能仲の眼にとまったのがこの床下に「寝そべっている」「オキナワ」たちであった。そのような、「オキナワ」の男たちに対する能仲の反応は、植民地統治下にあった国や島々を視察、旅行に出かけた人々の一般的な反応とっていいものであったと言っていだろう。彼等は一応に知識としては「沖縄人と云っても、立派な日本人」であるという考えはもっていた。それだけに「チャモロ土人に征服されている」ように見える「オキナワ」と呼ばれる「沖縄人」を許しがたかったのである。

「自尊心と体面」を重んじる能仲にとって、「闇の女」や「寝そべっている」男たちは、見るに耐えなかった。しかしそれは、特別な反応とはいえない。ここで注目されるべきなのは、そのような男たちを見て、それを「日本移民が海外に出て、排斥される理由」にあげている点であろう。「排斥される理由」は、むしろ、「土人を如何にして経済的に利用するか」といった考え方でしか土地の人々に臨まない態度にこそあったと思えるのだが、そこには全く気がついていないかのようである。

ピーターは「オキナワは日本のカナカ」とであると、「みんな」が言っていると紹介しているが、能仲は、それを認めまいとする。それはしかし、沖縄を「立派な日本人」だと思っていたからではない。「この群島の土人を統治する位置に立っている日本人」の中に、群島でも一段と低く見られている「カナカ」のような存在などないという自負から出ていたにすぎない。

次のような一挿話は、そのことを推測させるのに十分であろう。

私は一軒の沖縄人農家を訪れた。白の背広服に白靴という凡そ農園に相応しくない姿の私の突然の訪問に、異様の感じがしたのだろう。折柄昼飯を食べていた人達が、箸を動かすのを止めて私の方をじっと見ている。

「精が出ますね……」

「はっ……」

変な顔つきで農夫達は何も喋らなかった。私は会社の人ではないが、農場を視察に来たのだと話すやと納得が出来たのだろう。この家の主人らしい男が出て来て、私は木暮と云います、何か御用でと沖縄人にしては珍しい流暢な日本語？で答えた。

「那覇ですが、どうも沖縄では食えませんので……」

「島へ来て何年になります」

「四年です、一度帰りましたが……」

木暮君の話をきくと郷里にいて百姓をやっていたがギザギザの五十銭玉を握れることなどは珍しい。米の飯は食えず、芋ばかりの生活をしているので、これでは駄目だと考え、思い切って家と僅かばかりの島も売り飛ばし、興発の移民募集に応じて南洋へやって来た。最初この地へ入地して仕事にとり掛かるまで会社から千三百円の前借りをして家族四人で働いたのだが、それも二年半で返してしまい、今では小金も貯めていますというのである。百姓の困っているのは沖縄だけじゃありません、内地にいてはどんなに働いても、二年半では千三百円の借金は返せませんよ、と木暮君は熱のある口調で、足もとに転がっている石塊を威勢よく蹴飛ばした。石塊に驚いた四、五羽の鶏がココココと頓狂な声をあげて逃げ廻った。

「木暮」という姓は沖縄ではほとんど見られない。能仲は、「ギボ」というのを「キボ」に聞き違えて、「木暮」と表記したのではないかと思う。「ギボ」などといった姓があることを知らない者にとって、そのような取り違えはごく普通のことであるが、その「木暮君」が、「流暢な日本語？」を使ったことに

驚くのは普通とは言えないであろう。「沖縄人と云っても、立派な日本人ではないか」というのであれば、「流暢な日本語」を使うことは当然であり、むしろ「流暢な日本語」を使えない沖縄人の方を不思議に思っているはずなのである。しかし、実際は、能仲の言うとおり「流暢な日本語」を話せる沖縄人は、少なかった。それが、「オキナワは日本のカナカ」といったような言い方をされるようになる一因でもあった。沖縄人が、差別されてなかったということはないし、能仲にも、当然それがあったことは、「流暢な日本語？」云々という発言に見られる通りである。

沖縄人が「日本のカナカ」だと見られたのは、床下で昼寝をむさぼっている人たちがいたことにあるのではなく、むしろ、ぎりぎりの切り詰めた生活をしながら、それでもなお貧困から抜け出せなかったことにあったのではなからうか。「木暮君」たちは、日夜辛苦して成功した部類にはいるはずであるが、懸命に働けば皆が皆そうなるわけでもなかったのである。

私は更に興発の農場に働く小作人達の実際生活を見た。これら小作人は何れも内地に居たときは、借金に追われていた農夫達で南洋へ来て始めて生活の希望を発見したと云っている。若し真面目に働こうとするものなら必ず金は貯蓄できますと云うのである。然し誰でも寝ていては、金は残せるものではない。働かないものは一ヶ月僅か十円位の収入よりないものすらある。これに引きかえ働くものは一家四人でも月百五十円余の収入があると云っている。而もこの農場に働く沖縄移民達は、その生活も極度に切り詰めているので、中には五人位の家族で月二十円そこそこであげているものすらあった。五人で二十円となると、一人当たり四円、四円で一ヶ月生きて行くというのはどうした生活方法をとるのか、私には分からなかったが、こんな生活をしてながらも、彼等は将来の光明を目指してせっせと働いている。ここに沖縄移民の辛抱強さがあるのだろう。

むしろ、多くの沖縄移民は、ここに写されているように「極度に切り詰めた」生活をしていたのでなからうか。

能仲が、「五人で二十円となると、一人当たり四円、四円で一ヶ月生きて行くというのはどうした生活方法をとるのか、私には分からなかった」と、述べているように、沖縄の移民たちの多くは爪にひをとぼすような生活をしていたのである。彼等も「白の背広服に白靴」が欲しくなかったはずはない。できれば「辛抱」などしないで、能仲が、上陸するとともに「チャモロ娘の温かい血の情熱を感じた」ように、美しい娘たちと「温かい血の情熱」をわかちあいたかったはずであるが、そのような余裕がなかったのである。その余裕のなさが、やがて彼等を「チャモロの床下」に追い込む。そして遠目には「昼寝」をほしのままにしているかにうつり、それが「日本のカナカ」といった見方をされる大きな原因になっていったと考えられる。

○

5月5日、横浜を出航した船は、「五日目の朝」サイパン沖合に停泊、「十二日の午後二時抜錨して」テニアンに向かう。能仲が、サイパンにいたのはわずか2泊3日に過ぎなかったということになるが、とても3日とは思えない行動力であった。

横浜丸は、夕刻にはテニアンの沖合に停泊。能仲たちはボートで上陸する。

私はテニアン神社に参拝したその足で、島の南に一かたまりになっている市街を見物した。街の名はカナカ語でソンソンとつけている、まだ建設時代のテニアンは街といっても、サイパンとは比較にならない程寂しく、人通りも少なかった。街外れには四、五軒の粗雑な料理屋と、安っぽいカフェーが二、三軒軒を並べていた。この付近が島で一番繁華な通りであるらしい。ふと道角に立てかけてある看板に、氷あります、というので私は同行のS君に誘われて一軒のカフェーへ入った。見ればカフェーというよりは、場末の酒場よりもっとひどいもので、床の処々に穴さえ開いていて、入るといきなり、その穴に足を突き込んだ私である。すり切れたレコードがガチガチと回転し、四、五人の客が隅の方で気焔を挙げていた。見ればあの強烈な泡盛の罌が五、六本空になって転がっている。この暑いのに、泡盛を呑んで、なお熱かろうと思ったが、終いにはてんでに一人宛立ち上がっては喇叭飲みをした。

きけば興発で働く沖縄人達で、新たにきのうこの島へ上った仲間の歓迎会だという。泡盛を各自ラッパ飲みをする歓迎会——私は随分物凄く歓迎宴があるものだなとおもっていると、飲んだ空蟻は床の上へ、各自が申合わせたように叩きつけた。一本の空蟻がガチャンと気味悪い音をたてて壊れた。【乱暴すると叩き出すよ・・・】

だぶだぶと太った女給が、さっさとテーブルをかたずけて、一団にさあ出ていけ、と言っている。泡盛団は別に女給の言葉に不平も言わずに外へ出た。暖簾にはカフェー、テニアンと書いてあった。客も客だが、女給も女給だ。さすがは新開地のカフェーだと私は呆れて室内を見回したのである。壁板のあちこちには汚らしいメニューみたいなものが、幾枚も張られてあった。

能仲によると、横浜丸は「サイバンとテニアンの両島に移民五百名と一般乗客百五十名」を降ろしたという。能仲は、サイバン上陸に際して「沖縄移民の大半はここで下りてしまった」と書いていた。移民の殆どが沖縄人であったことからして、テニアンで降りたのも、かなりいたかと思われるが、能仲がそこで見た「歓迎会」は、僅か4、5名という少なさであった。

しかし、4、5名とはいえ、「泡盛を各自ラッパ飲みをする歓迎会」は、能仲ならずとも驚かされたはずである。能仲は、横浜を発つてすぐに「どうしても日本人とは思えないような生活振りで」ある沖縄移民たちを見ていたし、上陸第一歩の地点のサイバンでも、「あれは日本人か？」と案内者に聞かなければ分からないような「床下」に住む沖縄移民を見ていた。それだけに、ある種の沖縄移民像が彼に出来上がっていたことは間違いないが、またもやテニアンでも、彼は沖縄移民には度胆を抜かれたのである。



能仲の旅はサイバン、テニアンの後、ロタ、ヤップと続く。ロタ、ヤップでは、沖縄移民と遭遇しなかったのか、沖縄移民に関する記述は見当たらない。

船は「横浜を出帆して十三日目にコロールへ入港する」。能仲の旅は、横浜丸の回航に従っていたように見えることからすると、コロールへの上陸は5月18日。「南洋庁の所在地を通称パラオ島と呼んでいるが、実際はパラオ諸島或

いはバベルダオブ島のコロール島という周囲一里そこそこの島」で、「市街といっても、内地の田舎街よりもっと寂しい街」であった。

私は依光主事や石川課長の好意で倶楽部に一先ず旅装を解くことにした。

この倶楽部は軍政時代からの建物で、中には球台や碁将棋盤が備えてあって、庁の役人達が夜退屈凌ぎに集まる場所で、芝生と椰子林に囲まれた閑静ない家であった。倶楽部の直ぐ前が南洋庁で、庁舎は一見すると二階建てのようであるが、床下がべら棒に高いので、この下を利用して倉庫や監獄に当てている。床下を高くするのは湿気と暑さを防ぐためらしい。南洋では何処の島へ行っても監獄のことをカルボスといっている。カルボスとはチャモロ語で監獄という意味だという。パラオの監獄は本庁続きの支庁の床下にあった。留置所がないので、刑務所も留置所も1つ部屋を使っている。島でカルボス入りをするものは大抵相場が決まっている。邦人では泡盛が罪をつくる沖縄人の傷害と、島民では禁止の酒を呑んだものと、罪状は先ずこの2つに限られているようだ。この庁舎の付近には役人の官舎がずらりと建ち並んで、官舎街を形づくっていた。

「島でカルボス入りをするものは大抵相場が決まっている」という「監獄」の話は多分又聞きであろうが、それを聞いて、能仲は、少しの疑問すら抱いてない。むしろ当然だと思っている気配すらある。

「泡盛」をラッパ飲みしていた酒飲みたちの姿が焼き付いていただけに、「傷害」を起こすものが多く酒によるものだという話が出れば、たちどころに沖縄人が思い浮かんできて当然だった。

能仲は、さっそくお決まりのコースを歩く。

コロールの街端れに行くと、日本人経営の料理屋が四、五軒あるが、半数は沖縄女を抱えている沖縄料理屋だ。私は島に滞在中二、三軒の料理屋を覗いたがどの料理屋もガタビシヤな建物ばかりで内地などでは先ず三流処というようなものばかりだ。

「カルボス」入りも「料理屋」つとめも、つきつめてみれば貧しさに発していたはずである。それは、沖縄の移民たちが、移民地にあってもなお貧困に喘いでいたということを示しているが、コロールには、景気のいい沖縄人たちがいた。

こんな小っぼけな島に住む人達がどれだけ料理屋へお賽銭を献上するかというと、自動車に乗る客の数が一番いい例を見せてくれる。お盆の中に入れられるような島に自動車が動いて、それで商売がなりたつのかと不思議に思った私だったが、運転手に聞くと、船が入港したときは送迎の客で少し忙しいがその外は殆ど料理屋から乗せる客ばかりだという。しかも島には車が現在六台運転しているが、一日平均八十回から百回動くというから一寸真実に思えない。一台が八十回とすると一日に四百八十台、一体誰がそんなに乗るのかと私はいくら計算しても腑に落ちなかった。

「料理屋から料理屋へ、一町位でもどンドン乗るんですから……」

「景気がいいからだろう」

「ええ一台が六十五銭、ガソリンがまず普通二銭位焚きますが、われながらぼろい商売だと思いますがへへへへ……」

どの運転手もこんな馬鹿みたいに巧い仕事は当世ありませんよ、とっている。乗る客の多くは鯉景気に酔っている沖縄の漁夫達と、それに続いて役人であるらしい。波止場にでも行かなければ精々乗って、二、三町も乗れば、それでお終いだ。私はこの島の人達は一体足をなんのために持っているのかとさえ思った。

どのような生活をしているのかわからないが、「四円で一ヶ月生きて」いるような貧しい生き方をしているものがあるかと思えば、一町位しかない「料理屋」への行き帰りに自動車に乗って、金を湯水のように使っている生き方をしているものもいる。

能仲は「鯉景気に酔っている沖縄の漁夫達」の話聞いて、そこでもまた「どうしても日本人とは思えないような生活振り」だと思ったに違いない。能

仲には、沖縄の漁夫たちが、「料理屋」の行き帰りに自動車を使っているのは、天に舞い上がっているかのようにつり面白くなかったであろう。能仲の、「床下」の移民たちへの不快感、そして「自動車」を乗り回している漁夫たちへの不信感といった反応は、蔑視と嫉視のあらわれにほかならないが、それだけにとりわけ後者の大尽振る舞いをしている沖縄漁師たちを許しがたいものと思えたであろう。

沖縄の漁夫たちが、「鯉景気に酔って」いたのは間違いない。それは、南洋の海が、絶好の漁場だったことにある。そして「沖縄の鯉漁業船がああ海上へ出漁して釣るから、多分ああ海上あたりにはいるのだろうと云う具合で、漁船が釣り始めてから試験船がノコノコと出かけて行く」といった具合で、沖縄の「鯉漁業船」は、未知の海を開拓し占領しているも同然であった。鯉はいくらでもいたし、尽きることはないと思われたであろう。好景気にわく鯉漁業者の行状を能仲がいまましいものに思ったのは、それが沖縄人であったことと全く無関係であったとはいえないだろうし、「自動車」を乗り回して使う金があったら、それを同胞の扶助に使って欲しいという思いも或いはあったかもしれない。

能仲は、コロールを拠点にしてバベルダオブ島（パラオ本島）、ペリリュウ島そしてアンガウル島に渡っているが、アンガウル島でも、やはり、島に渡った時のお決まりのコースである「料理屋」訪問をしている。

こんなガタピシャな料理屋でも島人にどれだけの慰安を与えているかそれを想うと、所詮男にとって女なしの生活は死を宣告すると同様なものであろう。

私はやがて出てくる女に期待の姿勢をとりながら、お湯のようなビールをぐっと一息に呑んだ。

やがてパタパタと草履の音が廊下に聞こえた、三味線を小脇に抱えて、今晚は・・・と云って、入って来た女をフト見上げた私は、ハット驚きの声をさえあげようとした。これでも芸者なのか。色は日焼けしたのか真っ黒で而もそれがよれよれになって、見るからに貧相な恰好の女である。私は今一度、—— これでも芸者なのかと思いつつ彼女の容姿をじっとみつめた。

汗のためか、それとも塗りが悪いのか、頬や襟足の処々剥げかかって、中



から赤ちゃけた地肌が見えている。汗臭い臭いがブーンと鼻をついた。

『何か唄わない？わたし弾くわねえ、どうぞ——』

彼女は三味線を取りあげて突然弾き始めた。見ると胴には蛇の皮を張っている。ガチャガチャとその音はまるで味も素っ気もない旋律で、聞いているのに神経の疲れさえ覚える、これがその沖縄の蛇皮線だ。芸者も沖縄の芸者だった。どうりで顔や姿は内地芸者と趣がまるで違うと思った。何を唄っているのか、何を弾いているのかで私には見当がつかなかった。一座はそれでもこのジャビセンの音でどうやらさっきの呆れた雰囲気から少しく開放された。私は続けざまに飲めないビールを二杯程あおった。そうでもしなければ、この物凄く芸者をまともに見ることが出来なかったからである。

彼女の経歴を語るとこの旭屋にくる前にサイパン島で同じように二枚鑑札で働いていたが、いくら女ひでりのサイパンでも最初のうちは客もついたが、終いには新しい女が入ってくるので、遂に既得権益まで犯されて島にいたまらず、このアンガウルへ流れて来たのだ。それに彼女はサイパンにいた頃堂々たる島の男達に混じって自転車競争に出場し、十五周で一等をとったことがあるという偉い肩書つきの女で、サイパン島に於ける自転車競争の選手権保持者なのだ。体のデブデブに似合わず腕だけは筋肉隆々として男のように凄かった。

デブデブと太って日焼けした真っ黒な肌、塗った白粉が所々剥げかかり汗くさい体、よれよれの浴衣といった恰好の女、その女の弾く三味線は「ガチャガチャとその音はまるで味も素っ気もない旋律で、聞いているのに神経の疲れ」を覚えさせる。「何を唄っているのか、何を弾いている」のか、さっぱりわからない女の三味線。「沖縄の芸者」と「沖縄の蛇皮線」。ここには流浪の果てに無残な姿をさらしている女が大写しに写されている。能仲はそれを得々と写すだけで、女への一片の哀情すら汲み取れない。あるのは蔑視のみである。

○

能仲は、横浜丸から「東の島々を廻る郵船春日丸」に乗り換えて、6月29日午前10時コロールを出帆する。「客の多くは鱈漁業の沖縄人と小商人たちに、

それに僅かばかりの闇の女たちが混じっている」といった船旅であった。どこへ行くどんな船にも沖縄人たちはいる。そして、彼等の船旅にはあいもかわらず「泡盛」と「踊り」があった。

私たちのダンスに対抗したわけでもなからうが、沖縄の漁業移民たちは船室で毎夜のように泡盛を呷ってはやけに踊り狂った。

「あれが沖縄独特の旅のいでたちですよ」

沖縄に五年もいたという鯉節商人が傍らから説明した。

「沖縄人の桃太郎さん物語一寸喋ってみましょうか……」

そう言って彼は変テコな口調で、私に桃太郎さん物語を教えてくれた。

昔、昔、爺ヤと婆ヤとありました 爺さんは山へ 柴刈りに

「ンカシ ンカシ 短命ト半死トアジアビタン、短命ヤ山ンカヘ 柴カイガ、  
婆やは 川へ着物を洗いに 行きました 川 の 上から

「半死ハ カーランカヘチンアライニ、イチャビタン。カーランノ、ウイカラ  
大きな 桃の 一ツが 流れて 来ました

「ウーキナ、ムムヌ、テーチ ナガリデ チアービタン……」

私はどう考えてもこの琉球語の「桃太郎さん物語」は分からなかった。文字にして考えて見れば二つ三つの言葉は想像もされるが、日本（常？ 引用者）の会話までこんな調子で話されるのだから分かる筈がない。

「私たちのダンス」と沖縄の漁業移民たちの「踊り」。その違いは「泡盛」や喧騒のあるなしよりも伴奏具とでもいえる「蓄音機」と「三味線」の違いにあるが、能仲は、いうまでもなく、前者を価値のあるものとして、そこから後者を眺めていた。野卑、洗練といった見方に立てば、確かに「踊り」が野卑に見えたということはあろうが、「ダンス」では代われない「旅のいでたち」として、「踊り」がいかに大切なものであったか、その中に入ろうとしなかった能中には、ついに理解できなかった。

何よりも不思議なのは、「分かる筈がない」言葉で話されるとしながら、能仲はどうして「沖縄人の桃太郎さん物語」を紹介しようとしたのだろうか。沖

繩の言葉に理解を示さなければならぬ切迫した事情や、日本人の誰もが知っている物語を沖縄人も共有しているということをそこで敢えて強調する必然性などなかったことからすれば、短命＝爺や、半死＝婆やといった語呂合わせの面白さにだけ引かれての紹介であったと見られないこともない。

能仲の旅は、貧しさだけが目立った農業移民たちの奔めいていた島から漁業移民たちの豪遊ぶりが目立つ島へと段々に移動していた。

「コロールから出帆して四日目の午後」小さなカメレオンという島が見え、翌日午前8時頃水曜島の近くを通り、夏島の港に入る。「この島へ長官が見えたのは十余年振りだということで、船は入港前から既に沖縄の鰹漁船が、万国旗を柱につけて本船まで迎えに来た」というように、トラックでははからずも沖縄の鰹漁船に迎えられた。

なるほどトラック島は海上から見たと同じく島には平地というものは殆どなかった。何処も此処もデコボコで、支庁などは軍政時代に建てたと云う山の高い頂上にあつて、その支庁舎まで登るのに腰も痛くなるほど骨が折れた。島は坂道ばかりなので、自転車もなければ勿論自動車もない。手車くらいあるかと思うとその手車もない。凡そ乗り物という乗り物は全くないのがこの島の風景だ。波止場から少し歩いて左へ入ると日本人部落がある。きけば島には日本人の家屋が三、四十軒ほどあり、大部分はコブラの仲買かそれとも雑貨商でその他は沖縄の鰹漁業者だと云う。コブラは茲一兩年前より表南洋から日本へダンピングをするので群島のコブラは減法に相場が下落して島のコブラ商もいまでは青息吐息だということであった。

トラック島(夏島)に住んでいる「邦人」の職業といえばコブラの仲買か雑貨商、それに鰹漁業者であるが、鰹漁は沖縄人が独占している。そして「トラックの邦人達で今の処景気のよいのは鰹漁業者で既に沖縄の漁業船が二十一艘この島を本拠地として近海に出漁している。南洋の鰹漁業は内地のように漁期が一定しているわけではなし、年中穫れるので島の産業としては将来この鰹漁業であろう」と、能仲は、コブラの下落で悲鳴をあげている「日本人」と比べ

「沖繩人」の景気よさを述べるとともに、鰐漁こそ将来の産業であると説く。そして、お決まりのコースの紹介が始まる。

「鰐の巣を御案内しましょう……」

久保君は私の返事も待たずに或る一軒の料理屋へつかつかと上った。私はいくらなんでも白昼鰐の巣を覗くのもどうかと思ったので暫く玄関の前で躊躇した。すると中から白首の女が三、四人ドヤドヤと出て来て、私をまるで地面から吊るしあげるようにして玄関の板の間へ引きずり上げた。とんでもない料理屋だと思ったが、もうここまでくれば仕方がないと観念した私は、勇敢にこの家の鰐どもを見物することにした。

六畳の部屋へ久保君と私は案内された。隣の座敷では沖繩の女が、いやにかん高い声でわけの分からぬ唄を唄っている。部屋などはあの稀代のアンガウルの料理屋に比べて、左程遜色のないものだった。唐紙などは古新聞をベタベタ張りつけ、ゴザも処々破れて、中から粗削りの板さえ見えていた。

夏島には、3軒の料理屋があった。そのうちの一つに能仲は案内される。能仲を案内した男の話によると「島の人たちは料理屋のことを鰐の巣」と呼んでいるとのこと。それは「昔はどの料理屋にいる女も鰐のような顔をした女ばかりであった」ことによるという。能仲らはその「鰐どもを見物する」ことになるが、彼女らは予想以上の「しろ物」だったことに言葉を失い、ぬるいビールを2、3杯飲んで立ち去る。

能仲は、そこで「隣の座敷」に「沖繩の女」がいたという。「隣の座敷」にいるのが、「沖繩の女」だとどうしてわかったのだろうか。「いやにかん高い声でわけのわからぬ唄を歌っている」というだけで、それがどうして「沖繩の女」だということになるのだろうか。能仲は、もう嫌というほどわけのわからぬ歌を甲高い声で歌う女たちと出会っていたことから、多分、その推測に間違いはないと思う。「沖繩の女」は、どこの料理屋にもいたことが彼の報告には見えていたし、彼の推測を疑うわけにはいかないが、「わけのわからぬ唄」が、すぐに「沖繩」と結びつくほど、沖繩は、能仲にとって縁遠いものでもあったのである。



トラック諸島から「日本委任統治下で、最も大きな島」ポナベ島へと、能仲の旅は続いていく。海上から見るポナベの島は、「まるでボカした水彩画でも見るようで」美しい。そこにも「料理屋」はあって、「沖縄女」がいた。

ポナベの島にも日本人料理屋がやはり四、五軒あった。どの料理屋にも沖縄女が三、四人宛混じっていて、皿踊りや長刀踊りを見せては客を喜ばせている。沖縄女と内地女とを置くのは、料理屋にすれば内地女だけでは饜の神様たちが登楼しても話が通じないので、どうしても沖縄の客を登楼するには沖縄女を置かねばならないのだという。それにまた内地女は沖縄の客に肌を許すことは気持ちの上でも出来ないと云っているの、どうしても置かねばならないのだと云っている。沖縄の客が料理屋の玄関に現れると、

「金があるか、見せろい……」

と云って、客だかなんだか分からない粗野の言葉で先ず庭先で財布の中を検討する。金があるとなるとそんなら上がれと云う調子だ。

なにしろその風景は、お前は金があるから遊ばせてやるのだ。有難く思えと云う鼻息だから、一寸内地などでは想像もつかないものがある。私はポナベ滞在中島の人達と共に二軒料理屋を覗いた。

「沖縄の女」たちが、何故どこの「料理屋」にでもいるのか。能仲はあけすけである。そして辛辣でもある。「一寸内地などでは想像もつかないものがある」としながら、ここでは当然だといったふうなところがある。

能仲は、余程「沖縄人」たちの言動に我慢ができなくなっていたのかもしれない。差別される沖縄をあけすけに書いているのもそのことのあらわれであろうが、「料理屋」とは別に「事業地」の沖縄についても遠慮を無くしていく。「一寸人間が住めそうにも思えない不便な寂しい地」にある「興発の事業地」を訪れた能仲は、「こうした不便な山中で、真っ黒なカナカや特に凶暴性の激しい沖縄移民を相手に仕事をしなければならない所員達は、単に資本案対従業員というような気持ちでは到底これ程の仕事は出来ないだろう」と書く。

沖縄移民を「凶暴性の激しい」ものにしたのは、何なのか。能仲の頭には、そのような疑念のよぎる余地はない。どの島にでもいるが、「統治者」としての誇りを全く持ち合わせていないどころか、「統治者」の面を汚すことばかりしているように見える沖縄の移民たち。横浜を出る時から、とうていなじめそうにも思えなかったが、果たして旅の終わりを迎える頃には、その情をおさえることができなくなっていたのである。

能仲の南洋の旅はポナベからクサイ、そしてヤルートで終わる。最後の地でもやはり「料理屋」に出かけている。

料理屋はマングローブの繁った海岸に建っていて、満潮のときは縁側まで海水が流れてくるという殆ど海の中に立っているような家である。私は蔭山君と共に飯を食いに一夜出かけてこの料理屋の女達に会った。芸者が三人に酌婦が三人いた。うち一人はこれまた偶然私が樺太の豊原にいた頃土地の料理屋で芸者をしていた女であった。(中略)—— 樺太を去ってから東京にブラブラしていたが、食えないのでとうとう南洋へ流れて来たというのだ。日本から四千何百哩、まさかこんな地でお目にかかるとは思わなかつたわと、ただ一遍の顔見知りのこの私に対して余程懐かしく感じたのであろう。女の目には何時までも涙が光っていた。

「もうここより流れて行く処はありませんよ、東の端ですからね……」

女はそう言って三味線を取りあげ、樺太節を弾いた。爪弾きの音の中になにかしら女の寂しい心音がにじみ出ているような気になるのであった。

能仲に、優しい心がなかったわけではないのである。かつて樺太の「料理屋」で会った女。それが懐かしいというのではなく、果てから果てまで流れて来た女に対する哀情といったものが、ここには見られる。

これまで能仲は、どの島でも足を運びながら、「料理屋」の女たちに対して一片の同情すら寄せなかった。それは、多分、どの「料理屋」にも、沖縄の女がいたからに違いない。そして、沖縄の男たちが騒いでいたということもあろう。

旅の終わりになって、能仲は、やっと「日本人とは思えないような」人間たちに会わなくてほしかったのであろう。「この島には沖縄の鰹漁夫もトラックやポナベのように入り込んでいないので、喧嘩もなし平和なことこの上もないということである」と書く。それが、「沖縄」について触れた能仲の最後の文であった。

注記

使用テキスト 能仲文夫著 小菅輝雄篇 復刻版『南洋紀行 赤道を背にして』  
(1990、5、29 財団法人南洋群島協会)

旧漢字、歴史的仮名遣い及び句読点等、読みやすいように適宜改めた。